

お勝手の姫

登場人物

七ツ森

姫

男

女

叔母

ギヤルソン

健太

暗い室内。

オルゴールの音。

タキシードを着た中年の紳士・七ツ森が、洗濯干しハンガーを持ち、やや疲れた足取りでゆつくりと現れる。

七ツ森、立ち止まる。

オルゴールの蓋が閉じる小さな音。

音楽、止まる。

間。

背後から女性の声。

声 整いました。

七ツ森、振り向かない。

間。

七ツ森 (振り向くか、振り向かないか、ほんのわずかに声の方へ顔を向け) ……
では……参りましょうか……。

暗転。

窓のある古い古いレストランの店内。

客は一組だけ。晴れ着姿の女と、若い男。

老ギャルソンが、流れるような動きで給仕している。

ギャルソン ごゆっくりどうぞ。

ギャルソン、テーブルを離れる。

女 中で？ こういう場合どうするんですか？

ギャルソン (非常に優雅な身のこなしでテーブルに戻ってきて) 外側のナイフとフォークからお使いください。

男、女、ギャルソンをじっと見る。

ギャルソン 外側から。

ギャルソン、二人に微笑みかけて退場。

見送る女と男。

間。

女 中で？ どうするの？

男 外側からだそうです。

女 (ナイフとフォークを手に持ち) これのことじゃなくて。

男 ああ……ご趣味は？ とか訊くんじゃないですか。普通は。

女 あなたそんなことちつとも訊かないじゃない。

男 そうですね。

女 普通じゃないの？

男 そうじゃないですけど、事前に資料をいろいろいただいているものですから、今さら何うのも、ちょっと白々しいかと思つて……。

女 嘘かもしれないじゃない。

男 嘘？

女 求人広告に「誰にでも出来るお仕事です。残業ナシ、長期休暇有り、高収入」

って書いてあったら信じる？

男 はあ……。

女 訊いてみないと。

男 えっと……、じゃあ、ご趣味は？

女 (誇らしげに) パッチワークと、鷹狩りです。

男 ……パッチワークと……？

女 鷹狩り。

間。

男、背広の内ポケットから一枚の紙を取り出し、広げて黙読。

間。

読み終わると、紙を元通りに折りたたみ、内ポケットにしまう。

男 ……おんなじじゃないですか。

女 嘘を言ったのかもしれないわよ？

男 ……。

女 どうする？

男 どうするって……。

女 訊けば？

男 ああ……。

女 「本当ですか？」って。

男 でも、また嘘をつかれるかもしれないよね。

女 失礼ね。

男 すみません。

女 嘘よ。

男 え？

女 あたしがそんな趣味もってるように見える？

男 はあ。

女 パッチワークなんて、めんどくさい。

男 ……鷹狩りは本当なんですか？

女 疑ってるの？

男 え……。

女 失礼しちゃうわね。

男 あなたがおっしゃったんですよ。嘘かもしれないって。

女 知ってる？ 大鷹って鶴とか捕ってくるんだって。あーあ。一度でいいからや
つてみたいなあ。(鷹を腕に留まらせるポーズ)

男 ……やったことないんですか？

女 (ポーズのまま、それは堂々と) ない。

男 それじゃ趣味じゃないじゃありませんか。

女 趣味にしたいって希望よ。

男 はあ……。

女 さつきからはあはあって……やる気あるの？

男 ええ、まあ……。

女 じゃ今度一緒にやってみない？ シーズンは確かね、冬なのよ。

男 (あわてて) え！ あ、いえ、鷹狩りをする気はありません。

女 なんだ……。

男 すみません……。

気まずい沈黙。

二人、食事を始める。

女 ねえ、これなに？

男 「温野菜のサラダ」って言ってましたね。

女 味、する？

男 野菜の味が……。

女、帯の間から塩の入った小さな袋を出し、皿に振りかける。

男 お塩、持ち歩いてるんですか？

女 かける？

男 じゃあ、少し……。

女 どっちで何回？

男 は？

女 どっちの手で、何回かけてほしい？

男 あ、自分で。

男、袋を受け取り、振ろうとする。

女 お葬式でもらったの。

男 (手が止まる) ……お葬式？

女 知らない人のだけどね。

男 (袋に書かれた小さな文字を読む) 「食用ではありません」。

女 ここに来る途中、通りがかりのお葬式でね、もらったの。

男 その格好で……。

女 もらえるものはもらう主義なのよ、あたし。

男 もらえるものって……。

女 かけないの？

男 はあ。

女 (塩を奪い取る) あなた、ほんとに失礼な人ね。

男 すみません。

女 暗いし。

男 おしゃべりは得意じゃないんです。

女 じゃあなにが得意なの？

男 ……。

女 (ため息) しりとりでもする？

男 え？

女 (強く) する？

男 ……はい。

女 あなたから。

男 え？

女 あなたから！ しりとり「り」！

男 ……リンゴ。

女 ゴーグル。

男 ルビー。

女 ビール。

男 留守。

女 スマイル。

男 ……留守番……電話。

女 ワッフル。

男 ……るる……る……留守がち。

女 チアガール。

男 あの、ちよつとすみません。

女 降参？

男 面白いですか？

女 つまらないの？

男 つまらないっていうか……苦しいんですけど。

女 イヤならなんか面白い話^{はなし}して。

男 無理ですよ。

女 人に言えないような失敗談とか。

男 人に言えないようなことを言うわけにはいきません。

女 ケチ。

男 ケチで言わないわけではなくて……。

女 あなた、今日ここになにしに来たの？

男 それなんですけど……。実は、あなたに謝らなければいけないことがあるんです。

女 どうやって？

男 は？

女 どうやって謝ってくれるの？

男 どうやってって……。

女 いろいろあるでしょ？ 土下座するとか、死んでお詫びをするとか。

男 ……なにを謝るか訊かないんですか？

女 どうして？

男 どうしてって……。

女 だって、謝らなきゃいけないんでしょ？

男 そうですけど……。

女 じゃあそんなこと訊いたって時間の無駄じゃない。

男 でも……、訊きませんか、普通……。

女 「フツウ」ってなに？ あなたに都合のいい受け答えをしてくれる人が普通？

そんな人と話してて楽しい？ 予想通りには物事が進んでいって、なんか面白いことある？

男 面白いとか面白くないとかじゃなくて……。

女 訊いてほしいんならそう言えば？ 別に訊かなくてもいいんだけど、そんなに言うなら訊いてあげてもいいから。

男 そんなふうに恩着せがましく言われても……。

女 なにその態度！ あなたほんとに謝る気あるの？ 大体「その件については謝る」とか「悪かったように思う」とか言う人が「ごめんなさい」って言ってるの、あたし聞いたことないわ。

男 ちょっと待ってください。

女 許さない！ なにを謝る気か知らないけど許さないからね！

男 ……。

女 ……でも。「ごめんちゃい」って言ったたら許してあげる。

男 ……は？

女 「ごめんなさい」じゃなくて、「ごめんちゃい」って言ったたら許してあげる。

男 イヤですよ。いい大人がそんな……。

女 いい大人が言うから面白いんじゃない。

男 ……申し訳ありませんけど……、最初からやり直していいですか？

女 勝手ねえ。

男 すみません。

女 じゃ五秒前。四、三……

男 ……なんですか？

女 (意外そうに) やり直すんじゃないの？

男 やり直すんです。

女 あたしが「キュー！」って言って、指をこうしたらやり直しね。いくわよ。五

秒前。四、三……

男 ……僕の好きなタイミングでやるのは、ダメなんでしょうか？

女 ダメなことないんじゃない？ あなたのことなんだから。

男 そうですよね……。

女 好きにやりたいの？

男 ええ、まあ……。

女 「ええ、まあ」って程度？ あたしはものすごく「キュー！」って、こうしたいんだけど。こう！（様々な角度に指を突き出す）

男 もうやってるじゃないですか……。

女 わかった。あなたが話^{はな}し出す直前に、心の中だけでキュー出することにする。

男 そんなことより話を聞いてほしいんですけど……。

女 あなた、さつきから「してほしい」ばかりね。あたしの言うことはなんにも聞かないくせに。

男 しりとりしたじゃありませんか。

女 ああ、しりとりで負けたことを根に持ってるんだ。

男 僕、負けたんですか？

女 だってあたしは負けてないわよ。

男 そうかもしれませんけど……。

女 続ける？ そっちの番よね。「る」よ、「る」！

男 (ため息) ……ルンバ。

女 バール。

男 ……ルノワール！

女 ルール。

男 (ため息) 僕は会社員じゃないんです。

女 「ぼ」じゃないわよ、「る」！

男 大手電機メーカー勤務ということになっていますが、実は……

女 「お」じゃなくて「る」よ、「る」！

男 戻してるんです。話を本題に。

女 断りもなく？ 今、あたしの本題は、しりとりで勝つことだけど。

男 やめませんか、もう。

女 はじめをつけないさいよ。しりとりは最後に「ん」がついて初めて終わるのよ。

男 ……(暗く) るるん……。

女 (さほどうれしくもなさそうに) 勝った。

男 ……満足ですか？

女 とつてもね。

男 もういいんですね。

女 どうぞ。

男 差し上げた身上書では、僕は会社勤めとなっているんですが……

女 なんの話？

男 身上書ですよ。

女 なに？ 身上書って。

男 なについて、学歴とか家族構成とか趣味とか書いてある……(内ポケットから紙

を取り出し) これですよ、これ！

女 どれどれ。(手を伸ばす)

男 (紙を引つ込め) あなたのです、これは！ 僕の身上書のことですよ！ 受け取ってるはずだ。読んででしょう？

女 読んでない。

男 読んでない？

女 見てもないわ。嫌いなよ、予習って。減るじゃない。楽しみが。

男 見てもいない……。

女 それがなに？

男 ええ……、あの、そこには僕が会社に…… (独り言のように) そうか……。見てないのか……。

女 あ！ 「だったら謝らなくてもいいかな」なんて思ってるんじゃないでしょうね！ あたしが機転をきかせて罨にはまらなかったからって、あなたがあたしを騙そうとしたことにかわりはないんですからね！

男 「機転をきかせて」っていうのも「罨」っていうのも、なんか違いますか。

女 やっぱり謝らない。

男 いや、謝りますよ。ただそれを書いた時点では、本当に会社員だったんです。

そこのところ……

女 まだ謝らない！

ギャルソン、現れる。

男 ……すみませんでした。

ギャルソン (皿を下げながら) 失礼致します。

女 「ごめんちゃい」でしょ？

ギャルソン ? (とりあえず) ごめんちゃい。

間。

ギャルソン、皿を持って退場。

女 終わり？

男 ……………え？

女 会社員じゃないんでしょ？

男 ……はい……。

女 それだけ？

男 ええ……まあ……。

女 なんだ、つまんないの。……じゃ、式場でも決めよつか。

男 はい？

女 さっき拾った雑誌がちょうど結婚特集だったの。(雑誌を取り出し) ほら、ここにいろいろ出てるから。

男 するんですか？

女 式を挙げるのはイヤ？

男 そうじゃなくて、結婚するんですか？

女 自分のことでしょ？

男 僕の話、聞いてました？

女 あなたの代わりに、あのおじいさんが謝ってたのだからちゃんと聞いてたけど。

男 僕は今、無職なんですよ？

女 無職の人だってするでしょ、結婚ぐらい。

男 ちよっと待ってください。

女 何分？
なんぶん

男 は？

女 ちよっとって何分？

男 何分じゃないでしょう？ 一生のことですよ？ そんな簡単に……。

女 一生なんて待てないなあ。(雑誌をめくり) あら、式場ってあんまり人が入らないんだ。五百人くらい呼びたいのになあ。

男 五百人……？

女 楽しいでしょ？ 大勢の方が。でもあたし、親戚も友達も少ないのよね。ああ、

招待状を不幸の手紙形式にしましょうか。「この招待状を受け取った人は、十日以内にこれと同じものを五人の人に送らないと不幸になります」。

男 それは不幸の手紙そのものですよ。

女 (さらにページをめくり) 新郎の衣裳ってどれも地味ね。あなたもドレス着ない？ ああ、でも並んで歩いたら裾がぶつかって邪魔か……。

男 ……………からかってるんですね……。

女 なに？

男 僕はからかわれてるんだ。あなた本当は結婚する気なんてないんでしょう？

女 自分はどうなの？

男 ……………。

女 あなたは今日、会社を辞めたことと、いくつかの「る」で始まる言葉と、あたしへの文句しか言っていないのよ？ そっちこそ結婚する気あるの？

男 ……僕は……来月から大学に戻ります。そこで出来れば、研究を続けようと思ってます。

女 だから？

男 だから今は……結婚なんて考えられないんです……。

女 でも来たんだ。

男 ……………。

女 そういう暗い顔してれば、断ってもらえると思って。

男 こういう顔なんです。生まれつきです。

女 あなたは、失礼で勝手に、ずるい人ね。

男 ……………。

女 大学か……。そっか……。そうだ、大学にしよう。

男 ……なんですか？

女 それがいいわ。広いし、人も多いし。

男 なんのことで？

女 結婚式場。

男 誰の？

女 あたしたちのに決まってるじゃない。そんなに頭の回転が悪いのに大学なんて戻って大丈夫？

男 どういうことですか！

女 会場の手配はあなたの担当ね。

男 僕のこと、ずるい人って……。

女 だってずるいじゃない。

男 なのに結婚するんですか？

女 どんな人と結婚しようとかあたしの自由でしょ？

男 僕の自由はどうなるんです？

女 無職でもずるくても、結婚する自由はあると思うけど？

男 失礼で勝手なのはあなたの方だ！

女 似た者同士。お似合いじゃない。

男 僕は結婚する気なんてないんです！

女 ……この話に反対なのね。

男 そういうことです……。

女 (楽しげに) 反対を押し切って結婚するなんてカッコいい。

男 本人の反対を押し切ってどうするんですか！ 押し切るんなら周囲の反対でし

よう、普通は！

女 だから「フツウ」ってなに？

ギャルソン登場。

ギャルソン スープでございます。

男 (ギャルソンに) あなたからもなんとか言ってください。

ギャルソン (非常に丁寧) 「海草のスープ」でございます。

女 (皿をのぞきこみ) 海草？

ギャルソン はい。

男 考え直してください。

女 ダメー。

ギャルソン いらつしやいませ。

七ツ森と婦人が現れる。

婦人は年にそぐわないお姫さまのようなドレスを着ている。

迎えに出るギャルソン。

七ツ森 予約した……

ギャルソン 七ツ森様でいらつしやいますね。お待ちしておりました。どうぞ。

ギャルソン、テーブルに案内する。

ギャルソンが婦人の椅子を引こうとすると、七ツ森はそれを制し、自ら婦人をエスコートする。

ギャルソン 食前酒はいかがいたしますか？

七ツ森 (婦人に) いかがなさいますか？

婦人、ゆつくりと首を振る。

七ツ森 (ギャルソンに) 食事のメニューを。

ギャルソン かしこまりました。

ギャルソン退場。

男は七ツ森に、女は二人に注目。

ギャルソン、メニューを持って登場。

ギャルソン メニューでございます。

七ツ森 (婦人に) なんでもお好きなものを。

婦人、黙ってメニューを七ツ森に渡す。

七ツ森 ……コースを二つ。

ギャルソン かしこまりました。

ギャルソン、退場。

男 ちよつと失礼。

男、席を立ち、七ツ森のところへ。

男 失礼ですが、七ツ森教授でいらっしゃいますか？

七ツ森 断る。

男 ……え？

七ツ森 断ると言ってるんだ。

男 僕、まだなにも…。

七ツ森 私が何年教師をやっていると思ってるんだ。単位をくれたあのレポートを待ってくれたの、一方的な頼みごとをする輩は声色を聞けばすぐわかる。

男 一般教養で先生の哲学の授業を受けた者です。

七ツ森 聞いていないんだ、そんなことは。それに私は現在、長期休暇中で先生ではない。

男 助けてください。

七ツ森 私たちは食事に来ただけで、君の救助に現れたわけじゃないんだ。

男 無理やり結婚させられそうなんです！

七ツ森 奇遇だな。こっちも今、無理やり助けを求められて困っているところだ。

男 結婚なんてしたくないんです。来月から研究室に戻るんです。

七ツ森 そうか。機会があれば渡り廊下でもすれ違おう。

男 常識の通用する相手じゃないんです。お願いします。僕、見たんです。教授がものすごい屁理屈をこねて堂々と会議をさぼっていらしたのを。お得意の詭弁きべんで彼女を説得してください！

七ツ森 私はいつも実理に立って論を進めているつもりだ。詭弁とは失礼な。

男 ……いいんです…。僕はどうせ、失礼で勝手でする人間なんです…。

男、おびえたような婦人の視線に気づく。

婦人、目をそらし、うつむく。

男はその時初めて、婦人の奇妙な装いに目を向ける。

七ツ森 いかげなさいました、姫。ご気分でも？

男 姫？

姫 いいえ……。ジオルジュ、お知り合い？

男 ジオルジュ？

七ツ森 以前少しばかり世話をした者です。すぐ追い払いますので。

男 そんなハイカラなお名前でしたっけ？

七ツ森 いいから戻りたまえ！

男 お願いします！

七ツ森 (女の残されたテーブルにふと目をやり) ……君の席はあそこか？

男 ええ。

七ツ森 ……代わってもらえないか。

男 は？

七ツ森 テーブルを代わってもらえないか？

男 かまいません。ちよつと待ってください。

男、席に戻る。

女 冷めたわよ。

男 すみません。

女 ねえ、これスープっていうより……

男 テーブルを移動していただけませんか？

女 えー？

男 お願いします。

女 いいけど、誰？

男 大学の教授です。

女 女の人は？

男 お姫さま……みたいです。

女 ふーん。

男 教授、どうぞ。

七ツ森 (姫に) 申し訳ございません。あちらのお席にお移りいただけますか。

全員、移動。

女、無遠慮にじろじろと姫を見る。

誰もやろうとしないので、男は仕方なく全員の食器を運び移す。

そこへギャルソン登場。

ギャルソン (女の前に皿を置き) 「温野菜のサラダ」でございます。

女 またあ？

男 (皿を運びながら) あ、すみません。席を交換してしまいました。

ギャルソン ……君、新しく入った人？

男 いや、あの、僕はお客なんですけど……。

ギャルソン お客様？

男 はい……。あの……すみません、勝手に……。

きよとんとしているギャルソン。

長い間。

ギヤルソン (元通りの落ち着いた調子で) 大変失礼致しました。ご遠慮なさらず、

なんでもお申し付けになってください。(一礼して去ろうとする)

女 お代わりなんて頼んでないわよ。

男 あ、あの、ですからそのお料理はあちらのテーブルへ……。

ギヤルソン 失礼致しました。

ギヤルソン、七ツ森たちのテーブルへ。

ギヤルソン お待たせ致しました。

ギヤルソン、給仕後、退場。

男、新しい自分の席へ。

女 引き出物、決めようか。

男 (席に着いたものの、七ツ森が来てくれないのであわてて) もう一回、失礼します。

男、七ツ森の席へ。

男 教授……。

七ツ森 ああ、すまなかつたな。

男 あの……、席、代わりました。

七ツ森 ああ、すまなかつたな。

男 席、代わりました……。

七ツ森 ああ、すまなかつたな。

男 席、代わったんですけど……。

七ツ森 ああ……。いつ終わるんだ、これは。

男 説得、してくれないんですか？

七ツ森 私は「代わってくれないか」と頼んだだけであって、交換条件を申し出たわけじゃない。

男 そんな……。

七ツ森 アウレリウスはこう言っている。「なにか外的な理由で苦しむとすれば、君を悩ますのはそのこと自体ではなく、それに関する君の判断なのだ」。(姫に) いただきます。

七ツ森、食事を始める。

男はしばらく立ち尽くしていたが、やがてとぼとぼと席に戻る。

女 引き出物、なんにする？

男 ……ちゃんと話し合いましょう。

女 だから「なんにする？」って訊いてあげてるでしょ？ 普段のあたしなら、こんなもの五秒で決めてるわよ。

男 ……この話は……なかったことにしていただけませんか……。

女 わかった。引き出物はなしだね。

男 わかってないじゃないですか！ 僕は誰とも結婚する気なんてないって言うてるんです！ 結婚というのは、二人の意志でするものだ。そうでしょう？

女 大丈夫。あたしの意志、二人分ぐらいあるから。

男 ……どうして僕なんですか！ 僕のどこが気に入ったんだ！ 教えてください。そこ、直しますから。

女 往生際が悪いところかな。

男 わかりました。直します。

女 それは潔くあたしと結婚するってこと？

男 ……。

女 ……あたしね、今日お見合いした人と結婚するって決めてたの。

男 ……決めてた？

女 うん。

男 会う前から？

女 うん。

男 身上書も見ないで？

女 そう。

男 なぜです？

女 したことないから。

男 は？

女 お見合いも、結婚も、したことないから。

男 それだけの理由で？

女 ものは試しよ。

男 試しってそんな……。もつと慎重になるべきです。次のお見合いで素晴らしい相手が見つかるかもしれないのに。

女 「かもしれない」でしょ？ それにまだやったことないものは他にも山ほどあるんだから、お見合いばかりそう何度もやってられないわよ。

男 それにしたって……。僕とあなたがうまくやっていけるとは、とても思えません。

女 どんな人とならやっていけそうなの？

男 それは……。なんていうか、こう……。物静かで、優しそうな……

女 誰とも結婚しないんじゃないの？

男 ……そうでした……。

女 だったら、あたしたちは同じでしょ？ あたしもあなたも、結果はもう決まっちゃってる。相手が誰であろうと関係ないじゃない。

男 それはそうかもしれないけど……。

女 なにか問題ある？

男 あるでしょ？ いっぱい！

七ツ森（姫に）ちよつと失礼します。（と、男の席へ）

女 なに？

男 なにってですから……

七ツ森 (男の肩に手を置き) 君は学者に向いていない。

男 (力なく) はい？

七ツ森 困難を乗り越えるだけの強い意志と克己心^{こっきしん}。積極的な姿勢。論理的な思考力。これが学術研究者の必須条件だ。自分の考えをいかに正確に伝えられるか、いかに核心をついた発展性のある疑問を投げかけられるか、学者の能力はそこに問われるのだ。

男 僕は……

七ツ森 責めてるわけじゃない。ただ君にはその適性がないというだけの話だ。

男 確かに人と話すのは得意ではありません。ですが研究をしたいという気持ちは……

七ツ森 情熱と適性の間に因果関係はない。その件に関しては、「下手の横好き」という言葉がちゃんと残されている。悪いことは言わない。大学に戻るのはよしまえ。

男 そんなことを言われても、もう会社を辞めてしまいました。

退屈になった女、残された姫のところへ。

七ツ森 専攻はなんだ。

男 応用物理です。

七ツ森 (怪訝そうに) 畠山^{はたけやま}のところか？

女 (姫に) こんにちは。

姫 …… (会釈で応える)。

女 (サラダを指し) それ、味、する？

姫 ええ。

女 あたし、お塩持つてるけど。

姫 ありがとう。お気持ちだけいただきますわ。

女 (七ツ森の席に腰掛ける)

七ツ森 あんな疑り深くて食い意地のはった男のもとで、よく研究しようなんて気

が起きるな。

男 学者は皆疑り深いです。七ツ森教授だって講義の中で「すべてを疑え」とおっしゃったじゃありませんか。

七ツ森 もちろんそうだ。それにさっき言い忘れたが、物事に対しての執着心も学者に欠かせない条件ではある。しかし畠山の場合、その執着が食べ物へ食べ物へと向かうその点が問題だと私は言ってるんだ。

女 お姫さまって、毎日なにしてるの？

姫 窓の外を見ています。

男 畠山教授にそういう傾向が強いことは認めます。ですが科学者としては立派な方です。僕は尊敬しています。

七ツ森 あいつが私になにをしたか知っているか。

姫 庭の緑や、空の色。なにが洗濯物を乾かして、なにが洗濯物を乾かさないか。そういうことを。

女 へーえ……。

七ツ森 盗み食いの濡れ衣を着せたんだぞ？

男 盗み食い？

女 他には？

姫 なにも……。身の回りのことはすべてジョルジュがしてくれますから。

女 ジョルジュってあの人？

姫 ええ。

女 (振り返って七ツ森を見る)

七ツ森 たまたま食堂で隣の席に座っていたというだけで、自分の弁当をちよっと食べただろうとぬかしやがった。

女 召使いは何人ぐらいいるの？

姫 城にはわたくしとジョルジュの二人きりです。

女 淋しいわね。

男 それで？

七ツ森 私は朝飯を食い損なっているもそんなことはしないし、どうせやるならち

よっとなんてケチなことは言わず、舐めたようにきれいに食い尽くすはずだと言
ってやった。

男 朝食、召し上がっていなかったんですか？

七ツ森 そうだ。

姫 わたくしは、淋しいという気持ちを知りません。わたくしのそばにはいつもジ
ョルジュが……いつでもジョルジュが、ついていてくれるのですから。

女 ふーん……。

男 犯人は誰だったんです？

七ツ森 原因は奴の軽率な思い込みだ。単に弁当箱の中身が片寄って隙間が出来て
いただけの話だった。あえて犯人を挙げるなら、奴の女房の節約精神と言えない
こともない。そのような低俗な状況にいつ巻き込まれてもいいという覚悟がある
なら、もう止めはしない。研究室に戻りたまえ。そして畠山に、弁当の中身はき
ゆうきゆうに詰めてもらえとくれぐれも伝えてほしい。

ギャルソン登場。 姫たちのテーブルへ。

ギャルソン 「海草のスープ」でございます。

女 またあ？

ギャルソン は？

七ツ森 (女に気づき) なにをしているんだ！

女 お姫さまのお相手。

七ツ森 小学生じゃあるまいし、自分の席に戻りなさい。

女 面白いからもっと話したい。

七ツ森 面白ければなんでも許されると思っっているのか。

男 思っっていると思いますよ、この人は。

七ツ森 この女は君の担当だろう。物理の人間は人を巻き込むのが趣味なのか！

ギャルソン ……まだスープを召しあがっていらっしやらない方は？

七ツ森 私だ！ (女に) 早くそこをどきたまえ。

女 (姫に) いつもこんなふうにな怒ってるの？

姫 いいえ……。どうしたのです、ジョルジュ。

七ツ森 大したことではございません。どうぞお食事をお続けください。

ギヤルソン 立ったままでお召し上がりになりますか？

七ツ森 なぜそんなことをしなければならいんだ。そこに置いておいてくれれば

いい！

ギヤルソン ですがここにこうしますと……

女 またあ？

七ツ森 またあじゃない！ 私のスープと席だろう！ どうして君たちは一度言っ

ただけではわからないんだ！

ギヤルソン どうぞ温かいうちに。

男 (女をどかしながら) まずはスープを飲んでいただきますよう。お話はそれから。

七ツ森 それからなどない！ (着席して姫に) お騒がせいたしました。

姫 ……ジョルジュでも、あんなに大きな声を出すことがあるのですね。

七ツ森 醜態です。

七ツ森、全員の見守る中、スープを飲む。

ギヤルソン いかがでございました。

七ツ森 美味しい。美味いがこれは……スープか？

ギヤルソン 「海草のスープ」でございます。

ギヤルソン、満足げに退場。

七ツ森、スープを飲み終え、スプーンを置く。

女 飲み終わった。

七ツ森 ……まだいたのか。

女 ねえねえ、お姫さま……

七ツ森 無礼者ばかりで申し訳ございません。(女と男をテーブルから遠ざけ) 近寄らないでもらえないか。

女 訊きたいことがあるのよ。

男 ほら、言うことをきいてくれる人じゃないんです。

七ツ森 言うことをきかないのは君だろう。解決への道は自分で模索したまえ。

女 あの人、どこの国のお姫さまなの？

七ツ森 私に訊くな。

女 (大声で) ねえねえ！

七ツ森 (あわてて取り押さえ) 彼女にも訊くな！

姫 日本語しゃべってるから日本のお姫さま？ ジョルジュってあなた、どこの国の人？ お姫さまって「わらわは姫じゃ」とか言わないの？

七ツ森 家内のことは放っておいてくれ！

男 家内？

七ツ森 (失言)

男 ……奥様なんですか？

女 なんだお姫さまごっこか。じゃあだし、お后ごうごうさまね。あたしのことは「女王陛下」と呼ぶように。

七ツ森 ……「ごっこ」ではない……。彼女は本気で、自分がお姫さまだと思いついでいるんだ。

女 いい年のくせに、凶々しいわね。

男 一体どうして……。

七ツ森 知らん。

男 知らんですませている場合じゃないでしょう。いいんですか？ 召使いのように働かされて、ジョルジュなんて名前で呼ばれて。奥さんなのに……それでいいんですか？

七ツ森 私は別に召使いのように働かされているわけではなく、召使いと思われることを特別否定せず、生活を営む上で必要な労働を進んで引き受けているだけだ。

家庭内労働というものは奥が深いぞ？ 終わりが無いしな。それにやってみればわかることだが、アイロン掛けや洗い物などのルーティンワークは、驚くほど思索を凝らすのに向いている。哲学者はみんなハウスキーパーになればいいんだ。

女 なるほど。

男 なるほどじゃありませんよ。

七ツ森 呼び名に関してだが、私は仕事上、「教授」と呼ばれることに慣れている。

よって同じ文字数、同じ母音で構成され、ヒアリングの上では非常に「きょうじゅ」に酷似こくじしている「ジヨルジュ」と呼ばれたところで、さほど違和感を感じられない。

男 論点が違います！

七ツ森 語尾なんておんなじ「じゅ」なのだ。

女 立ち話もなんだから座らない？(姫のところへ)よろしければご一緒にしません？

男 そ…：…そうですよ、教授。是非ご一緒に！

七ツ森 これは家庭内の問題なんだ！ 君たちには君たちの問題があるだろう！

男 だからこそです！

女 (姫に) ね？ 食事は大勢の方が楽しいから。

姫 ですが…：…。(七ツ森に助けを求めようとする)

七ツ森 私たちにかまわないでくれ！

女 お姫さま、あなたに、訊いてるんですよ？

姫、困った顔のまま暗転。

3

姫、七ツ森、男、女が同じテーブルに座っている。

ギャルソンは四人の皿を片づけているところ。

ギヤルソン (男に) お下げしてもよろしいですか？

男 あ、はい……。すみません。

ギヤルソン 失礼致します。(退場)

女 (男に) あなた、魚の食べ方下手ねえ。

男 いや、だってこれは……。

七ツ森 姫の前で見苦しいぞ。

男 箸を使えば僕だってもう少しは……。

女 もらえばいいじゃない。(大声で) ちょっとすいませーん。ここにお箸……

男 (制して) いいですよ、もう下げられちゃったんですから。

女 まだ捨てられてないわよ。

七ツ森 もうよさないか。大体フランス料理に箸が出てくるわけないだろう。

男 でも、フランス料理にどうして煮魚が出てくるんですか？

女 フランス人だって煮るでしょ、魚くらい。

男 どうしてだしのきいてる醤油味なんです？

七ツ森 質問ばかりしていないで少しは自分で考えたらどうなんだ。それが学徒の務めだろう。

男 ですが……！

七ツ森 それほどうるさいことを言うなら、フレンチレストランなど選ばなければよかったんだ。

男 僕が決めたんじゃないやありません。

女 ここを予約するまでに十三回も電話したんだから。

七ツ森 (周りの席を見て) そんなに流行^{はや}っているようには思えないが。

女 デタラメにダイヤルして、十三回目にもたまたまこのお店に掛かったの。六回目には田中さんて家の人が出たんだけど、「お宅でお見合いさせてもらえませんか」って言ったら、断られちゃった。

男 ……お見合いをなんだと思ってるんですか。

女 結婚相手と綺麗な服着て食べ物屋さんで会うことですよ？

男 あなたは……なにか根本的に間違ってますよ！ お清めの塩のことといい……

男 あれじゃ僕とのお見合いを認めたことになる！

女 いいじゃない。あの人、物静かで優しそうよ？

男 お見合いをしてるのは、僕とあなたなんですよ？

女 でも誰が相手でも断るんでしょ？

男 そうですけど……。

女 だったら楽しい方がいいと思うけど。

男 楽しくなんかない！

女 それは楽しもうっていう意気込みが足りないのよ。

男 快樂主義を唱えたエピクロスは「一時的な快樂は、本当の快樂ではない」と言っていますよ。

女 なんです？

男 そうですよね、教授！

七ツ森 その論拠は？

男 え！ えつと……それはその……目先の快樂ばかりを追いかけていると、あとでバチが当たるから……。

七ツ森 そんなおばあちゃんが孫に言い聞かせるようなことを、私は論議した覚えはない。

女 （七ツ森に）で？ なんで一時的じゃダメなの？

七ツ森 求めたものが必ずしも得られるとは限らないだろう。一つの欲望を満たし、次のそれが満たされなかった時、不快を感じてしまうからだ。

男 （女に）あなたも永続的な快樂を追求してください。

女 永続的な快樂ねえ。具体的にはどうすればいいわけ？

七ツ森 積極的に快樂を追求しないことだ。

女 えー。

七ツ森 むしろいかなる状態に直面しても、それによって心を乱し、不快を感じることはないような平静な心を持たねばならないだろう。

男 （惚れ惚れと）そのとおりですよ……。

女 不快なんて感じる前に、次の楽しみを手に入れればいいじゃない。

男 それは「右足が沈む前に左足を出せば水の上を歩ける」っていうのと同じ理屈
でしよう。

女 歩けないの？

七ツ森 ……君なら歩きかねんな。

ギヤルソン (二人分の皿を置き) お待たせ致しました。(姫の席が空いているのを
見て) こちら様の分はどこへお運びいたしましょう？

七ツ森 今、呼んでくる。(立つ)

ギヤルソン ではすぐにお持ち致します。(退場)

男 きちんと誤解を解いてくださいね！

七ツ森、窓の外を見ている姫にそっと近づく。

姫 ……取り乱したりして、ごめんなさい。

七ツ森 姫……。

ギヤルソン、残りの二人分の皿を持って登場。

女 (皿を指し) これ、なあに？

ギヤルソン 「ポトフー」でございます。

姫 わかっています。父の……国王陛下のご命令なのでしょう？

七ツ森 (とりあえず調子を合わせて) 驚かすつもりはございませんでした。

女 なんだったって？

ギヤルソン 「ポトフー」でございます。

姫 ジョルジュが悪いわけではないのに……困らせてしまいましたね……。

女 ……ポ、ト……？

ギヤルソン フー。

姫 もう心配は無用です。さあ参りましょう。相手の方に失礼をお詫びしなければ。

(席へ向かう)

七ツ森 姫、あの……。

テーブルへ戻った姫を、ギャルソンは椅子を引いて迎える。

その隙に七ツ森は男と女に耳打ち。

七ツ森 やるぞ……。

男 ……なにをです？

七ツ森 見合いだ。

女 そうこなくっちゃ。

男 どうして！

七ツ森 とにかく姫に恥をかかせるな。

男 そんな！

女 お見合いおばさんやってもいい？

七ツ森 勝手にしてくれ。(自分の席へ)

男 教授！

姫 お恥ずかしいところをお見せいたしました。どうぞお許してください。

女 (別人) そんなことお気になさらないで。こちらこそお恥ずかしいわ。この人ったらお魚の食べ方は下手だし、勉強ばかりしてる頭でっかちなんですよ。

姫 (努めて明るく) どんな勉強をなさっていらっしやいますの？

男 ……専門は物理なんです、具体的には……

女 そんなお話したってお姫さまがお喜びになるわけないでしょう？ あなたからもっと気の利いた質問でもしたらどうなの？

男 ……(苦し紛れに) 黒がお好きなんですか？

姫 ……特別好きということもございませんが……どうしてでしょう？

男 ……髪の毛が……黒いから……。

間。

突然、叔母さんの登場。

叔母 やあね、なんだかひと雨来そうよ？ それにしてもこのお店わかりづらい場所ねえ。看板出せばいいのよ、看板。

ギヤルソン いらつしやいませ。

叔母 あらこんにちは。ねえ悪いこと言わないわ。看板作った方がいいわよ。ほら、全然お客さん入ってないじゃない。

ギヤルソン 貴重なご意見、ありがとうございます。

男 (絶望的に) 叔母さん……。

叔母 ああ、いたいた。(手近な椅子を勝手に持って四人のテーブルに着く) どっこいしょつと。

ギヤルソン ただいまメニューを……

叔母 ああ、ごめんなさい、電車の中でパン食べちゃったのよ。小腹がすいちゃつて。お水だけいただける？

ギヤルソン かしこまりました。(退場)

叔母 そうだ。ひとつだけ残っちゃったのよ。アンパン！(取り出して男に) 食べる？

男 僕はアンコは食べないんだってば。

叔母 でもつぶ餡なのよ？

男 来なくていいって言ったじゃないか。

叔母 だってまみちゃん一人じゃ叔母さん心配で心配で。

男 その呼び方、やめてって言ったろ？

叔母 この子、「まさみ」っていうでしょ？ だから真ん中の「さ」をばぶいて、まみちゃん。

男 一文字ひとくらいはぶかないで呼んでくれたっていいじゃないか！

叔母 あなた一張羅なんだから汚しちゃダメよ？ 叔母さん、タオル持ってきたから。これ、前に掛けなさい。

女 アンパンもらってもいいですか？

叔母 どうぞどうぞ。あなたがお相手の方ね？

女 違います。

叔母 違う？（初めて状況を確認し）……まみちゃん、あなた、どなたとお見合
しているの？

女 （七ツ森の目配せに気づき、再び別人になって立ち上がり）それじゃあそろそ
ろ若い人たちだけでゆっくりお話ししていただきましようか。ね、ほら叔母様も。
（と、立たせる）

叔母 （連れて行かれながら）あたしちゃんとお写真を見たのよ？ どうなってる
の？ まみちゃん。ねえ、この方なんでしょ？ 鷹狩りがご趣味だっていう……

女 そうそう。腕にこうして留まらせてね。

姫 （立ち上がる七ツ森に不安げに）ジョルジュ……。

七ツ森 遠くには参りません。ご心配なさらずに。

姫 ……。

七ツ森 おそばにおりますから。

男 （やはり不安げに）教授……。

七ツ森 ご無礼のないように。

女、叔母、七ツ森、隣のテーブルへ。

男と姫の間には沈鬱な空気。

女 本物のおばさんは、やっぱり迫力が違うわ。

ギヤルソン （相手を間違えないように、慎重に水を持ってくる）どうぞ。

叔母 なにがどうなってるの？（七ツ森に）あなたどなた？

七ツ森 ご迷惑をおかけしています。私は甥御おいごさんの大学で教鞭とを執っております

七ツ森と申します。

叔母 大学の先生がどうして？

事情を説明する七ツ森。

ギヤルソンは、少し離れたところから、誰がどこへ移動したか念入りに確認

する。

男 ……あの……。

姫 (怯えて) はい……。

男 いえ……。 (うつむく)

ギヤルソン 失礼致します。お料理をあちらのお席へお運び致しますよう。

姫 (すばやく制して) このままで！ ジョルジュはすぐに戻ります！

男 そうです！ すぐに戻ってきます！

ギヤルソン これは失礼致しました。

男 (女の皿を持ち) でもこっちは運んじやってください。

ギヤルソン かしこまりました。

ギヤルソン、女の皿を運ぶ。

姫と男、再び重い空気の中へ。

叔母 そういうことだったの……。

女 (皿を置かれ) どうも。

叔母 あら、おでん？

女 「ポトフー」っていうんだって。ね？

ギヤルソン さようでございます。

叔母 まあ、外国ではおでんのことをそう言うのね。

ギヤルソン (微笑んで退場)

叔母 それで？

七ツ森 こんなことをして事態が好転するという保証はどこにもありません。しかし、家から一步も出ず、私しか話し相手のいなかった家内にとって、なんらかの刺激になるかもしれない。なにかを思い出すかもしれない。ご迷惑なことは承知の上でお願いいたします。このまま少しの間だけ、見守っていただけませんか。

叔母 ……お医者様にはお連れしたの？

七ツ森 ……いいえ。

叔母 まあ、どうして？

女 どうしてお医者さんなの？

叔母 だってあんなドレスなんか着て、ご主人のお顔もわからないのよ？ お医者様に診ていただくべきだわ。

女 そうかなあ……。

叔母 普通じゃないもの！

女 また「フツウ」か。

七ツ森 ……あの服を着せているのは私です。ジョルジュと呼ばれて返事をしてい
るのも私だ……。もし、どうしても……誰かが狂っていると言われなければなら
ないなら……それは私だ……。私なんだ……。

姫 (果敢に話しかけてみる)ジョルジュとはお知り合いでいらっしやるとか……。

男 ええ……あの、以前、勉強をみていただきました。

姫 家庭教師……。

男 家庭……ではありませんでしたが、先生です、はい……。

姫 ジョルジュは、無口だけれど優しいでしょう？

男 それは……お姫さまにだけではないでしょうか。僕たちにはよくしゃべって敵
しかつたです。

姫 そうでしたか……。

再び沈黙。

叔母 ゆすつてみましたか？

七ツ森 ……なんです？

叔母 ゆさぶつてみましたか？

七ツ森 は？

叔母 まさ子さんが亡くなった時……まさ子さんてあたしの兄のお嫁さん、つまり、
まみちゃんの母親ね。あたしはゆさぶつてみましたよ？ それでなにがどうなる

ってわけじゃありませんけど、はっきりするでしょ？ 寝てる人は起きるし、ポ
ーっとしてる人はしゃんとするし、死んでる人はそのままですしね。

女 なるほどね。

叔母 まさ子さんはそのままだったわ。

七ツ森 家内は寝てるわけでも死んでるわけでもないし、以前ムチウチをやっ
てるのでゆさぶりたくなんでありません。

女 でもやるだけやってみたら？

七ツ森 断る。

男 きよ……ルジュさん、遅いですね。

姫 ええ……。

男 呼んできましようか。(立ち上がる)

姫 いいえ……。待ちましよう。ジョルジュが、わたくしのためにならないこと
するはずはありません。そして彼の判断が、間違っていたこともないのです。

男 (座る) 奥さ……お姫さまのことを、大事に思っていらっしゃるんですね。

姫 ……それが彼の仕事だからです……。

叔母 ねえ、あたしにまかせてくださらない？ あたしね、すっかり惚けてなにも
話さなくなったおばあさんを喋らせたことがあるのよ。

女 すごいじゃない。どうやって？

叔母 とにかく話しかけるのよ。思ったことなんでもいいの。「今日はお天気ね」と
か、「朝ごはんはなにを食べた？」とか、「カラオケは好き？」とか、「お隣の息子
さん、学校も行かないで昼間からぶらぶらしてるみたいだけど、どう思う？」と
かね、とにかく質問攻めにするのよ。

女 それでそれで？

叔母 そしたら「うるさい！」って。

女 へーえ。

叔母 「しつこい！」とも。

七ツ森 ……相手が死人だつてそう言うでしょう、きつと。

女 ところで、あっちの様子はどうか？ (姫と男の様子をうかがう)

男 あの、お魚食べるの、お上手ですね。

姫 ありがとうございます。

男 僕は、あの、言い訳じゃないんですけど、海から遠いところで育ったもので……。

女 言い訳じゃない。

男 お生まれは、どちらですか？

姫 ……忘れてしまいました……。

男 は？

姫 たくさんのことを、忘れてしまいました。大切なことばかり、なぜこんなにも、と驚くほどたくさん。……忘れてしまうのなら、いつそなにかも忘れてしまえばいいのに……大切なことを忘れてしまったということだけは、忘れられないのです……。

男 ……それは、早口言葉かなにかですか？

女 まみちゃんは話題をふくらませるのが下手ね。

叔母 とにかく、あたしにまかせてちょうだい。(向かう)

七ツ森 (追って) 待ってください、見守ってほしいと言ったが、なにかしてくれなんて……！

女 ねえ、ジオルジュ。

七ツ森 ……勝手に言うようだが、君にジオルジュとは呼んでほしくないな。

女 お姫さまとは、お見合い結婚？

七ツ森 ……。

女 ん？

七ツ森 ……そうだ……。

叔母に続いて七ツ森、女、見合いの席に着く。

叔母 お話はずんでる？

男 叔母さん……叔母さんはいつも誤解するんだけど、これは決して遠慮とかじゃ

なくて、なんていうか、祈りに近い、心の底からの叫びと言ってもいい、つまり、その……帰ってこないかな？

叔母 （聞いてない） あたしね、いつも不思議に思ってたんだけど、空ってどうして青いのかしら？

男 （あきらめて） それは可視光スペクトルの中でもっとも大きく散乱するのがエネルギーの高い青……

叔母 まみちゃんにじゃなくてお姫さまに訊いてるの！

姫 それは……綺麗だからではないでしょうか……。

叔母 はい？

姫 空は青いと……綺麗です……。

間。

七ツ森 ……おっしゃる通りです。

叔母 ……そうね……。そう、そうだね。空は青いと、確かに綺麗だわ。そう。それで青かったってわけね……。

女 じゃ次の質問。大きくて、葉っぱを食べる白と黒の可愛い動物はなーんだ？

叔母 あなたね、それ質問じゃなくてなぞなぞよ、なぞなぞ。

姫 ……パンダ……ですか？

女 惜しい！ 正解は、蟻から見たパンダうさぎでした。

男 なにをやってるんですか、あなたたちは。

叔母 それじゃ次はあたしから。まみちゃんは、いくつまでおねしよをしていたでしょう。

男 叔母さん！

女 それだってなぞなぞじゃない。

叔母 あら、これはクイズっていうのよ。

男 いいかげんにしてくれよ！

七ツ森 ご好意は充分伝わりましたから……。

叔母 正解はね、小学校五年生まで。このままだったらどうしましょってあたしもずいぶん心配したんですけどね。でもほら、おねしよがなかなか治らない子には天才が多いって説もあるでしょ？ まみちゃんはそのせいかお勉強はよく出来たのよ。おかげで今ではこうして立派な会社に……

女 辞めちやったのよ？

男 あーっ！

叔母 え……？

女 今、無職よ、この人。

叔母 ……冗談でしょ？ まみちゃん。

女 大学に戻るんだよね？ まみちゃん。

男 (頭を抱え込む)

叔母 どういうことなの？ 大学って……まだそんなこと言ってるの？ せっかく一流の会社に入れたのよ？ まだ一年もお勤めしてないじゃない。なにを今頃になって……

男 叔母さんが言ったんだろ？ 一度は社会に出なきゃダメだって。だから就職したんだよ。それでわかったんだ。僕は会社に向いていない。サラリーマンには向いてないんだ！

七ツ森 学者にも向いていないんだがな。

女 思い切って宇宙飛行士でも目指したら？

叔母 お父さんは知ってるの？

男 自分のことは自分で決めるよ。

叔母 (七ツ森に) あなたなんですか？ まみちゃんをそそのかしたのは。

七ツ森 私はあんなに意地汚くなんかかない。

男 いいからもう僕にかまわないでよ。

叔母 そうはいかないわ。あたしはあなたの母親代わりなのよ？ まみちゃん、あなたなんのためにお見合いしたかわかってる？ もう身を固めてもいい年なのよ？ 子どもじゃないのよ？ そんなわがママが通るとでも思ってるの？

姫 そう思っていらっしゃるなら……。

間。

姫 ……子どもではないと思っていらっしやるなら……ご本人の望む道を、行かせてさしあげてはいかがでしょうか……。

間。

姫 お可哀そうですね。……泣いていらっしやる……。

男 (涙目をぬぐい) わかってくれるのはあなただけです……。

女 会社なんて別に行かなくなっただけいいじゃない。許してあげれば？ 泣くほどイヤがってんだから。

七ツ森 しかし大人がこんなことで泣くだろうか……。

叔母 大人には経済力だつて必要だわ。

女 (男に) ねえ、食べないの？

姫 (遠くから心配そうに様子をうかがっているギャルソンに気づき) せっかくのお料理が冷めてしまつてよ、ジョルジュ。

七ツ森 ……いただきます。

叔母 お父さんだつて定年まであと何年もないのよ？

男 助手になればすこしは給料だつてもらえるよ。

七ツ森 (食べながら) いっそもらわない方がいいような額だがな。

叔母 (ため息) どうしてひと言相談してくれなかったの？ そんなに会社がイヤだつて知っていたらあたしだつて……

男 許してくれた？

叔母 許しませんよ！ 当り前でしょう？ 会社が楽しくて楽しくてスキップしながら通かよつてる人なんていないのよ？ みんなお金のため、家族のためにつらい思いをして頑張つてるんじゃない。

女 そうなのお？

叔母 そうよ！

女 だったらみんな辞めちやえばいいのに。

叔母 まあ、なんて乱暴なこと言うの？

女 他人のために犠牲になるなんて恥ずかしいことだと思っけどなあ。

叔母 家族は他人じゃないわ。あなたも結婚すればわかります。それに先立つものがなかったら、どうやって食べていくの？

女 (男の肩を力強く叩き) 食べ物のは心配しなくても、鷹狩りで獲物を捕ってあげるからさ。

男 やったことないくせに……。

叔母 とにかく、お勤めは続けなさい。

男 だからもう辞めちやったんだってば！

叔母 「僕が間違っていました。ごめんなさい」って謝って取り消してもらいなさい。

大人はみんな働いてるわ。人間は働くべきなのよ。何度同じことを言わせるの？

七ツ森 (ナプキンで口を拭き) あなたは事実判断と価値判断を取り違えているよ。うだ。確かにマルクスは、労働が人間であることと密接に結びついていることを唱えたが、「みんながそうだから」という理由から「そうあるべきだ」とは結論できない。

叔母 なにがおっしゃりたいの？

七ツ森 家庭内のゴタゴタはお宅に持ち帰ってくださいということですよ。

叔母 家庭内のゴタゴタ？ その言葉、そっくりお返しするわ。まみちちゃんの大事ななお見合いをこんなメチャクチャにしておいて、よくそんなことが言えるわね。

男 叔母さん！ 頼むからもう帰って！

叔母 ダメよ！ こういう恩を仇で返すような人にはちゃんとやっておかないと。

女 (帯締めをいじりながら) いいぞー、やれやれー。

男 帰らないならせめて黙っててくれよ！

叔母 なにを言ってるの、まみちちゃん。あなたのためなのよ？

七ツ森 本当にそうでしょうか。

叔母 当り前です！ あたしはいつでもまみちちゃんのためを思っ……！

七ツ森 あなたがあらゆることに関して善意でいっぱいなのはよくわかりました。いかにこまごまと甥御さんの世話を焼いてきたかも、想像に難くありません。その結果、彼は自分一人ではなにも決められない。社会人として組織に参加することもできない。これがあなたの望む「まみちゃんの幸せ」ですか？

男 教授までその呼び方、やめてください。

七ツ森 あなたが彼に干渉し、独占するのは、自分がいかに自己犠牲的で必要とされるに値する人間か、思い知らせるためではないんですか。

叔母 なんてひどいことをおっしゃるのかしら。確かに必要とされていたとは思いますが。でもそう思わない人なんている？

女 はい。 (挙手)

叔母 人間は助け合わなければ生きていけないわ。あなたが冷たすぎるのよ。あなたにもっと優しい気持ちがあれば、この方だってこんなふうには……。

男 叔母さん！

女 (男に) ねえ、それ食べないならちようだい。

叔母 ……あなたさつきアンパン召し上がらなかった？

女 帯を緩めたらおなかが減っちゃった。

叔母 あらやだ！ あなたそれ、緩めたんじゃなくてほどこいちゃったのよ！

女 そう？

叔母 まあ大変。ぐずぐずになってるわ。すぐに直さないと。

女 楽なだけで。

叔母 ほら、立って！

叔母、女を立たせて着付けのやり直し。

叔母 この紐をしっかりと持ってちょうだい。

女 さつきアンコが手についちゃったんだけどいい？

叔母 ダメですよ！ 困った人ねえ。(姫に)ごめんなさい。これ持っていただけ？

姫 (立つ) はい……。

女性三人は着付けに。

七ツ森 ……強敵だな。

男 そうなんです……。

七ツ森 だが君の叔母さんの言うことも、あながち間違っではないかもしれない……。

男 どういうことですか？

七ツ森 さつき私は、家事労働が思索を凝らすのに向いていると言ったろう。

男 そうでしたっけ？

七ツ森 ……。(こらむ)

男 すみません、自分のことに必死で……。

七ツ森 君に易々^{やすやす}と単位をやってしまったことを、私は深く後悔している。

男 本当にすみません、家事のことですよね？ それがなにか。

七ツ森 考えごとに適した状況……。それがなにを意味するかわかるか？

男 いいえ……。

七ツ森 孤独だ……。素晴らしいひらめきも憂鬱な心配ごと、思いついたら最後、それをとどめるものがなにもない……。ふと我にかえつても、目の前にはおたまやらヤカンやら、生きていく上で本当に必要なかと疑わざるを得ないまぬけな道具がいくつも転がっている。おまけに生ゴミが臭ったりもする……。あの虚しさ表現できる言葉を私は知らない……。そんな場所に、私は家内を閉じ込めていた。優しい言葉のひとつもかけず、もう二十年以上も……。

男 でも、今はよくやっついていらっしやるじゃありませんか。

七ツ森 「ジョルジュ」としてな……。

叔母 (帯を締め) ふんしょっ！

女 苦しい！

叔母 我慢なさい！

女の声にあわてて駆けつけるギヤルソン。

ギヤルソン どうかなさいましたか？

叔母 帯を直してるんです。

ギヤルソン (ホツとして) さようございましたか。(テーブルを見て) こちらは
お下げしてもよろしいですか？

男 これはあの人が食べるそうなので。

ギヤルソン どうぞごゆつくりお召し上がりください。(他の空いた皿を持って退場)

女 ……息するのがやっただ……。

七ツ森 君はそれくらいでちょうどいい。

叔母 お着物ってそういうものよ。

姫 ……やはり少し締め過ぎではないでしょうか。お顔の色がお悪いですわ。

叔母 (女の顔をじつと見て) そうね。おでこに血管が浮いてるわ。

女 (男の皿を指さし) あれ食べなきゃ……。

叔母 仕方ないわね。(やり直す)

姫 ……狩りをなさるのですか？

女 鷹狩り？ うん、獲物が捕れたらいいよね。

姫 ……あの方のために？

女 ねえ叔母さん、まみちゃんは動物をしめたりさばいたり出来る？

叔母 無理じゃないかしら。活造りのお魚が跳ねたのを見て鼻血を出してた子だか

ら。

女 情けないなあ。

叔母 でも煮物やチャーハンなんかは上手よ。

女 じゃ獲物を捕ってさばくところまではやってやるか。

姫 あなたは……。

叔母 はい、出来あがり。

女 うん。楽になった。(帯をバンバン叩く)

男 終わっちゃったんですか……。

女 いただきまーす。

女に続き、叔母、それからゆつくりと姫が着席。

叔母 はい、まみちゃん、お待ちませ。

男 待つてないのに。

女 うーん、やっぱりまだ苦しいなあ。

叔母 えーつと、なんだったかしら？

女 お見合いでしょ？

叔母 ああ、そうね。

女 (立ち上がり) ちょっと運動してこよう。あたしにかまわず続けて。

叔母 あらそう？ じゃお姫さまに質問。

姫 よしましょう。

叔母 え？

姫 もうよしましょう。この方は、わたくしなどと一緒になるべきではありません。

男 やっぱりそう思われますか？

七ツ森 口を慎みたまえ！

姫 あなたのことを、とても大切に思っていらっしゃる方が、おそばにいるではありませんか……。

姫、激しく体を動かしている女を見つめる。

女 (視線に気づき、動きを止めて) あたし？

男 その人は……！

姫 あなたに仕事やお金がなくても、あなたを守り、狩りをしてでも食べさせてさしあげるとおっしゃいました……。

男 別に僕だからってわけじゃないんです！ 彼女はただそれが面白いから……！

姫 よほどの覚悟がなければ、口に出れることではありません。それほどあなたの

ことを、愛していらっしゃる証あかしです。

叔母 そうだったの？

女 どんな人でも結婚しようと思つて来たのは確かだけど。

男 だから困つてるんじゃないですか！

姫 (女に) ごめんなさいね。つらいお気持ちを紛らわそうと、無理にたくさん召し上がったり、運動をなさったりしていらしたのでしょう？

間。

女、姫の肩をつかみ、ゆさぶつてみる。

七ツ森 よさないか！

叔母 それじゃまみちちゃんと結婚してくれるの？

女 この人といると次々に面白いことが起こるみたいだしね。

叔母 よかったわねえ、まみちちゃん。良い方かたで。

男 教授う！

七ツ森 なんだ。

男 なんとか言つてください！

七ツ森 誰になにを言えというんだ。むしろ私は君にしっかりしろと言いたい。

男 (小声で) あんな人と結婚なんて出来ません。そばにいられるだけでも困るのに。

七ツ森 (ため息をつき、女に) お嬢さん、彼はあなたのことをこう言っている。

女 なんて？

七ツ森 「君は僕の太陽だ」

叔母 (頬を染め) まあ……。

男 教授！

女 そりゃどうも。

男 (小声ながらも叫ぶように、悲痛に) なんてことをしてくれるんですか！

七ツ森 なんとか言えというから言ったままでだ。君は彼女にそばにいられては困る

んだろう。まともに見てられない。そういうことじゃないのか？

男 そうですよ！

七ツ森 太陽も同じだ。遠くにいてくれなければ困るし、直視することも出来ない。

男 そうかもしれませんけど……。

七ツ森 意識だ。我ながら簡潔できれいにまとめられたと思う。

男 誰も元の意味でなんてとつてくれません！

ギャルソン (現れて) 失礼致します。こちらは……

女 やっぱりもういいや。ごめんね。

ギャルソン ただいまデザートをお持ち致します。

男 (立ち上がり) 僕、帰ります！

叔母 あら、どうしたの？ まみちゃん。

女 おなかいっぱいで眠くなっちゃったんじゃない？

ギャルソン あの……すぐにデザートをお持ちしますので……。

男 帰るって言ったら帰るんだ！

姫 なりません！

間。

姫 ……帰ってはなりません。周りをよく見てごらん下さい。曇りのない窓ガラス。

塵ちりひとつ落ちていない床。シミひとつないクロス。磨かれた食器類。美しく飾られた花。そしてお料理……。どれもみな、わたくしたちのために用意されたものです。お店の方が、たいへんな時間と手間をかけて、あなたのために準備したものです。

ギャルソン お客様……。

姫 どうぞお席にお戻りを。

男、席に戻って座る。

姫 ……デザートをお願いします。
ギヤルソン いただきます。

ギヤルソン、退場。

女 お姫さまも言う時は言うね。

七ツ森 ……姫、申し訳ございませんでした。

姫 なぜ謝るのです？

七ツ森 このような場所にお連れしたことを後悔しております。不愉快な思いをなさったでしょう。

姫 わたくしが……どんなことを不愉快と思うか……どんなことを楽しいと……悲しいと感じるか……ジョルジュ、あなたにわかって？

七ツ森 ……。

女 あなたにはわかるの？

間。

女 どんな時にジョルジュは楽しいか、お姫さまにはわかる？

姫 ……。

ギヤルソン、デザートを持って登場。

鮮やかな手つきで給仕されていく皿を見つめる五人。

叔母 ……これは……なに？

ギヤルソン 焼菓子でございます。

男 焼菓子……。

ギヤルソン のちほどコーヒーをお持ち致します。

女 コーヒーじゃなくてお茶にならない？

ギャルソン 紅茶でございますか？

女 緑茶は？

ギャルソン あいにく当店では……。

女 紅茶でいいわ。

ギャルソン 紅茶がよろしい方は？

全員、挙手。

ギャルソン みなさま紅茶でございますね。かしこまりました。(退場)

女 叔母さんの分、ないけど。

男 (皿を叔母の方に押しやり) 僕、いりませんから。

叔母 まみちゃんがお食べなさい。叔母さんに気を遣わなくていいのよ。

男 僕はアンコはダメなんだったら。

女 これ、なんだっけ？

叔母 きんつばよ、きんつば。

男 どうしてそんなものが出てくるんだ……。

七ツ森 確かに焼菓子ではあるが。

叔母 細かいことはいいじゃない。いただきましょう。美味しそうよ。

叔母、七ツ森、姫はナイフとフォークで、女は手づかみで食べ始める。

女 ……あたし、ジョルジュにしようかな。

七ツ森 私と君はお友だちじゃないんだ。そう気安く呼ばないでもらいたい。

叔母 なにが？

女 まみちゃんやめてジョルジュと結婚しようかな。

叔母 なにを言いだすの！

女 だってまみちゃん、獲物はさばけないし、アンコも食べられないんだもん。

叔母 でもお勉強は出来るわ！

男 お勉強だったら教授の方が出来ます！

七ツ森 君はもつと洗練された責任の逃れ方が出来ないのか。

女 それにこの人、失礼でずるいし。

七ツ森 失礼とずるさでは、私はこんな奴になど負けない。

叔母 ちよつとあなた、ふざけるのもたいがいにしてちようだい。どうして急にみんなを困らせるようなこと言うの？ 帯だつてきちんと直してあげたじゃない。なにが不満なの？ ……なんのためにそんな……。

女 その質問、嫌いなよねえ。気持ちがスーッとさめちゃうのよ。せつかく楽しい気分でも、「なんのために？」って訊かれただけで、それまでの夢中だった自分がどつかにいつちゃう。なんで？ 理由なんて必要？ほんとにそんなこと知りたい？ 第一、本当の理由なんて考えてわかんと思う？

七ツ森 確かに、動かしがたい答を見つけるのは容易ではないだろうな。

女 でしょ？ だったら、「なんのために」なんていうのはただの意地悪じゃない。人のことを邪魔するためだけの質問よ。そういうことだからお姫さま、ジョルジュもらつてもいい？

姫 ……ジョルジュが…それを望むなら……。

女 ……悪い癖みたいね。あたしはあなたに訊いてるの。あなたの気持ちを訊いてるのよ。

姫 ……口にしたからといって…望みが叶うことは、とても少ないと思います。

女 言うより先にあきらめるからでしょ。

間。

女 見なさいよ。ケーキが食べたくても、黙ってればきんつば出されたりするのよ。欲しいものが手に入らないのは自分が悪いの。なにが欲しいか、どんなに欲しいか、言わなきゃ誰にもわかんないの。淋しそうにうつむいてれば、誰かがどうかしてくれると思った？ あなた一体なに様のつもり？

男 お姫さまでしょう。

女 そうだったわね。

叔母 ちよつと言い過ぎじゃなくて？

女 なんか腹が立ってきちゃったのよ。お姫さまなら堂々としてればいいじゃない。命令するならすまなそうな顔なんてしなければいいじゃない。どうしてそんな顔するの？ さつきジョルジュに訊いてたよね。わかんないから教えてよ。どんなことがうれしくて、どんなことが悲しいの？ なにが欲しいの？ ねえ、お姫さま。あなたの、望みは、なんですか？

姫 ……………。

長い間。

七ツ森 ……どうして黙ってるんだ……。

姫 ……。

七ツ森 どうしていつも、なにも言わないんだ……。家事がそんなに嫌か。一人で家にいるのがそんなにつらかったか。私になにをしてほしかった。……言えばよかったじゃないか。食べた皿ぐらい洗えとか、たまにはどこかへ連れて行けとか、文句をつければよかったじゃないか……。……私と一緒になどりたくなかったか……。……だったら断ればよかったんだ。あの見合いの席で。この店だ。このテーブルだよ。……言ってくればよかったんだ。黙ってないで……。お姫さまになんかならずに……！

長い間。

かすかに雨の音。

姫 ……ジョルジュ。

七ツ森 ……言葉が過ぎました……。

姫 そんなふうに……

雨の音。

姫 そんなふうと言ってくれたのは……初めてね。

間。

ギヤルソン、紅茶を運び持って登場。

ギヤルソン お口に合いましたでしょうか。

叔母 ごめんなさい、今、それどころじゃないのよ。

男 あの……このフランス料理って……

姫 たいへん結構なお味でした。シェフを呼んでいただけますか？

ギヤルソン シェフでございますか？

姫 ひとつ言お礼を申し上げたいのです。

なにやら騒ぎながら洗濯物の掛かった物干し竿を担ぎ、健太が駆け込んでくる。

健太 徳とくさん、降ってきたよーっ！ おっ込まないと濡れちゃうよーっ！

健太、当然のことに物干し竿を壁掛けランプに渡す。

ギヤルソン ああ、源ちゃん。

健太 また間違えてやがんな。俺は健太。源太は親父。親父は死んだの。

ギヤルソン ちようどよかったよ。

健太 (姫たちを見て) なにやってんだ？ 徳さん。

ギヤルソン (姫に) シェフでございます。

姫 たいへん美味しいお料理でございました。心より感謝いたします。

健太 そりやどうもご丁寧に。なんだよ徳さん、お客さんってほんのお客さんか

よ。

ギャルソン だめだよ源ちゃん。お客様がいらっしやるんだからお店にこんなもの持ち込んじゃ。(物干し竿を担いで退場)

健太 おい、ちよつと徳さん!

叔母 どういうことなの?

健太 あんたたちこそどうということだよ。この店はとつくに潰れてんだぜ?

男 潰れてる?

叔母 あらまあ。だから看板がなかったのね。

健太 なんだよ、お客にメシ作れって言うから俺はてつきり老人会の人たちだと思つて……味、薄かったろ? 塩分控えちまったからな。

姫 素材の味が生きている美味しいサラダでした。

健太 サラダ? ありや野菜の炊き合わせだよ。

男 「海草のスープ」は……。

健太 ワカメの吸い物だ。

叔母 じゃやつぱりあれは「おでん」なのね。

女 あなた誰?

健太 俺は一ノ瀬健太つって隣に住んでんだけど、親父がこのシェフだったんだよ。親父が死んで、店は潰れちまつて……あれから三年も経つんだなあ。

叔母 あなたはお父様の跡を継がなかったの?

健太 フレンチは苦手だね。俺は駅前の割烹料理屋で板前やってんだ。

七ツ森 そうか……。この店はもう、ないのか……。

ギャルソン、戻ってくる。

ギャルソン お目汚し物がございましたことをお詫び致します。

叔母 あなた、あたしたちを騙してたのね。

健太 ちよつと待つてくれよ! 知らなかったとはいえ、料理に関しては俺の責任だ。期待はずれのもの食わされたと思つたんならそれは俺が悪いんだ。もちろん

金なんていらぬさ。

ギャルソン そうはいかないよ源ちゃん。お客様に喜んでいただいて、お金を頂戴するのがレストランなんだから。

女、ギャルソンをゆさぶってみる。

健太 でも徳さんのサービスは決して悪くなかったら？ そりゃ見ての通り、ちよつと惚けちまったじいさんだから多少のポカはあったかもしれないけど、出来る限り最高のおもてなしをしただろ？ あんたたちが騙されたと思うのはもつともだよ。だけどこれだけはわかってほしいんだ。徳さんはこの仕事に誇りをもってる。お客さんに喜んでほしいと心底願ってる。だからこの店を大事に守ってるだよ。何度言っても聞きやしなかった。毎日毎日、たった一人で、掃除して皿磨いて花飾って、お客さんを待ってたんだ。あんたたちのこと待ってたんだよ。

ギャルソン 当り前だろう、源ちゃん。それが私たちの仕事なんだから。

健太 ムシのいい話かもしれないけど、いいサービス受けたなって、ほんの一瞬でも思えたんなら……頼むから……徳さんのこと、悪く言わねえでやってくれ。

ギャルソン みなさま、お楽しみいただきましたでしょうか？

間。

七ツ森 ……充分です。……あなたは、とてもよくやってくれました。途中、怒鳴ったりしたことをお詫びしたい。

ギャルソン とんでもないことでございます。

叔母 よく考えたら、あたしお料理いただいてないし、文句を言う筋合いじゃなかったわ。

男 あの、煮魚、汚く食べてすみませんでした。

健太 ああ、いいんだよ。わかってくれればいいんだよ。徳さん、いいお客さんでよかったな。

ギャルソン 失礼だよ、源ちゃん。

健太 健太だよ、健太！

女 ……あたしやっぱりまみちゃんと結婚するわ。

叔母 ほんと？

女 うん。さつきもお姫さまに言われて帰るのやめてたし、今も素直に謝ってたし、

案外聞き分けがいいんだなって見なおしちゃった。

男 あなたはどうしてそう節操がないんだ！

女 考えないからじゃない？

男 少しは頭を使ってください！

女 判断力の方に使ってるのよ。考えちゃうと鈍るから。

叔母 そうよ。それこそが正しい判断だわ。奥さんのいる人を好きになったりする

ものじゃなくってよ。

姫 ジョルジュ……結婚していたのですか？

叔母 あらいけない。

男 また叔母さんはもう……。

姫 答えなさい、ジョルジュ。……奥様が、いらしたの？

間。

七ツ森 ……はい……。ですが、いなくなってしまう……。……。

姫 なぜ？

七ツ森 わかりません……。ただ……私が当り前と考えていたことが、彼女にはそ

うでなかったのかもしれない……。

姫 探しに行かれたのですか？

七ツ森 いいえ……。

姫 なぜです。

七ツ森 ……怖かったのだと思います……。私のことなど知らないと、私のような

男は必要ないと……そう言われるのが、怖かったのだと思います……。

長い間。

姫 ……お給仕の方^{かた}。

ギヤルソン わたくしでございますか？

姫 あなたに、お尋ねしたいことがあります。

ギヤルソン お答えできることであれば。

姫 ここは素晴らしいレストランです。あなたのお心遣いが、すみずみにまで行き届いているのがよくわかります。

ギヤルソン 恐縮に存じます。

姫 このお店を大切に守られているそうですね。……たった一人で。

ギヤルソン 一人きりではございません。こうしてシェフもおりますし。

健太 いやいや、俺なんて今日だけだよ。たまに様子を見に来るくらいでさ。

姫 自分が動かないことには、空気も揺れないお部屋の中で、お客様を待つ毎日……。昨日と同じ今日、今日と同じ明日のくり返し……。それで……淋しくはありませんか。

間。

ギヤルソン ……わたくしは、掃除や皿洗いが好きでございます。皿やテーブルがピカピカになるのは気持ちのいいことです。それをお客さまに喜んでいただけるのは、もっと嬉しいことです。淋しいと思ったことはございません。

姫 ……あなたは、強い方^{かた}ですね。

ギヤルソン わたくしは、お客様とこの店を、この仕事を愛しております。ただそれだけのことでございます。

ギヤルソン、愛おしそうに店の中をゆっくり見渡す。

ギヤルソン この店は父から受け継いだものです。忙しい人で、遊んでもらった記憶などほとんどございませんが、父はレストランに関するあらゆることを教えてくださいました。ですからわたくしは、なにをどうすればいいか、すべてわかっております。そのような自分に誇りをもっております。

姫 そうでしたか……。

ギヤルソン そういうふうには、一人でも生きていけるように、父が育ててくれたからです。

姫 そう……。……そう……。

叔母 まみちゃんも早く結婚して子どもを産んで、そういう立派なお父さんになるのよ。

男 どうして僕が子どもを産まなきゃいけないんだ。

姫 ……ジョルジュ。お子さまは？

七ツ森 ……え……。

姫 お子さまはいらして？

七ツ森 あ、いえ、おりません……。

叔母 だったらハムスターを飼ってみませんか？ お友だちのところが増えて困ってるのよ。

男 今はペットの紹介なんてしてる場合じゃないだろ？

叔母 わかってないわね、まみちゃん。なにかを育てるってとても大事なことなのよ。別に自分の子どもじゃなかったっていいわ。甥っ子だってハムスターだって盆栽だつていいのよ。叔母さんの言ってることわかる？

女 まみちゃんとハムスターと盆栽はおんなじだつてことだ。

叔母 責任が生まれるのよ。自分のことだけを考えてはいられなくなるの。自分のことだつてそれまで以上に考えなければいけないわ。自分にはなにが出来て、なにが出来ないか。たとえばあたしの場合、まみちゃんにどんなことをしてあげられるかしらつて、いつも頭を悩ませてるでしょ？

男 ためになつているかどうかは別だけどね。

姫 教えてください、ジョルジュ。この方のお父様がなさったように、わたくしに、

あらゆることを。

七ツ森 あらゆることと申されますと？

姫 あなたが城でしているすべてのことです。お洗濯や食事の準備、アイロン掛けやお買い物の仕方、それらをわたくしに教えてほしいのです。

七ツ森 もちろんかまいませんが……なぜ……。

女 やりたいてって言うんだからやらせればいいのよ。理由なんていらないうって言うたでしょ？ それに働くお姫さまなんてカッコいいじゃない。

叔母 やつぱりなんと言われようと、人間は働くべきですからね。

姫 そうしてわたくしも城を守ります。ですからジョルジュ。あなたは……奥様をお探さない。

七ツ森 家内を、ですか……。

姫 そうです。……そして、奥様をみつけれたら……城に戻ってきてください。

間。

姫 必ず、戻ってきてください……。これは、命令ではありません。わたくしの……わたくしの……希望です。

間。

七ツ森 ……承知いたしました。

姫 ありがとうございます……。

姫、ごく微かに、それでも本当にうれしそうに微笑む。

姫 ……帰りましょう。

七ツ森 はい。

叔母 それじゃあたしたちも失礼しましょう。よかったわね、なにかもうまくい

ったわ。

男 あの、ちよつと……。

ギヤルソン お帰りでいらっしやいますか。少しお待ちください。(退場)

健太 (七ツ森の肩を叩き) 奥さん、蒸発か……。うちの兄貴んところもそうなんだよ。ま、あせらずしつかりやれよ。

七ツ森 ……ありがとう。

女 (七ツ森に) ねえ、結婚式、お城でやらせてくれない？

男 結婚式って……。

七ツ森 うちの築三十年の3LDKだ。

叔母 結婚式も大事だけど、まずはご両親にご挨拶に行かなきゃ。ね、まみちゃん。

男 教授……。

七ツ森 あきらめろ。それに君のその比類なき頼りなさには、彼女のような豪傑が必要だ。

男 哲学の先生なんですから、なんとか説き伏せて……。

七ツ森 心理学や精神医学と違って哲学は、実生活に即役立つようなことはしないのだ。

ギヤルソン、箱を手に戻ってくる。

ギヤルソン お待たせ致しました。

健太 なに持ってんだ？ 徳さん。

ギヤルソン 特別な日に当店をご利用いただいたお客様に差し上げている記念の品でございます。

健太 そんなことしてるから店が潰れちゃうんだよ。

女 中身はなに？

ギヤルソン オルゴールでございます。ただ……これが最後の一つでございます……。

叔母 誰にくださるの？

ギヤルソン (迷いに迷って) やはり……。

ギヤルソン、箱を姫に差し出す。

姫 わたくしに？

ギヤルソン はい。なんと申しましてもお姫様でいらっしやいますから。

女 あたし、もらえるものはもう主義なんだけどな。

ギヤルソン 誠に申し訳ございません。

姫、箱を受け取り、なにかを思い出すようにじっと見つめる。

姫 やはりこれは、あなたに。(と女に箱を差し出す)

女 くれるの？

姫 今日、あなた方にとって特別な日になったはずです。

男 (うなだれて) いろんな意味で……。

姫 今日の佳よき日の思い出が、オルゴールの音色とともに、いつまでも鮮やかに蘇えることを祈って。

女 サンキュー。

姫 お幸せに。

姫、女に箱を手渡す。

姫 参りましょう。

七ツ森 はい。

女 (箱の包みをむしりながら) ねえ、ここで結婚式できない？

男 なに言ってるんですか、このお店はもう……

健太 日本料理でよければ、俺が腕ふるうよ。

叔母 あら、ほんと？ 和食ならおばあちゃんも喜ぶわ。

女 じゃ決まりだ。

男 ああ、もうどいつもこいつも……。

女、オルゴールの蓋を開ける。

音楽。その音色に全員の動きがふと止まる。

ギャルソン またのご来店を、心よりお待ちしております。

オルゴールの音の中、暗転。

4

1と同じ、暗い室内。

熱心に話し込みながら、七ツ森と姫が現れる。

七ツ森 ですので食料のほとんどは駅前のスーパーで揃います。

姫 ですがジョルジュ。先ほど通りすがった山本精肉店の前に「二十九日は肉の日」という大売出しののぼりを見ました。二十九日に限っては山本精肉店を利用した方がよいのでは？

七ツ森 気がつきませんでした。そのようにいたしましたしょう。

姫 ……今日は疲れました。もう休みましょう。

七ツ森 はい。

姫、退場。

七ツ森、ため息をつき、タイを緩める。

姫 ジョルジュ、ジョルジュ。

七ツ森 どうなさいました？

姫、オルゴールを手に現れる。

姫 オルゴールが鳴らないのです。

七ツ森 拝見。

七ツ森、オルゴールを開け、覗き込む。

七ツ森 ……ゼンマイが切れてしまったのでしょうか。他の部品もかなり傷んでいます。

姫 直るのですか？

七ツ森 二十年以上も前のものですから……。明日、修理に出して参ります。

姫 直ってほしいですわ。元のおりに。

七ツ森 ……私も……。そう思います……。

姫、微笑んで去る。

七ツ森、オルゴールを見つめる。

七ツ森 あーあ……。こんな……。こわれちゃって……。

姫、戻ってくる。

七ツ森 ……なにか？

姫 本当にわたくしはダメですね。なにもかも自分ですると言ったばかりだというのに、またあなたに頼ってしまいました。

七ツ森 お気になさらないでください。

姫 修理には、二人一緒に参りましょう。

七ツ森 喜んで。

姫、ゆっくりと部屋に戻っていく。

七ツ森 (その後ろ姿に) ……トシエ……。

姫、立ち止まり、振り向くか、振り向かないか……。

溶暗。